気象災害対策　No.4

令和3年9月9日

日照不足による農作物への影響と対策について

農業総合センター
専門技術指導員室

●気象情報

日照不足に関する茨城県気象情報　第１号(2021 年 09 月 07 日 15 時 00 分　水戸地方気象台発表)によると、茨城県では、８月１２日頃から、日照時間の少ない状態が続いています。この状態は、今後１週間程度は続く見込みです。農作物の管理等に十分注意してください。

●影響と対策

１　普通作

【影響】

水稲では、連続的な降雨により収穫作業の遅れが心配される。ダイズでは、徒長による倒伏、着莢不良、粒の肥大不良、紫斑病、べと病、葉焼け病の発生が懸念される。

【対策】

（１）水稲

・圃場内雨水の排水、気象予報を基にした収穫作業の計画と実施、計画的な乾燥・調製の実施により品質の低下を防止する。

・籾は、成熟期を迎えても長雨により水分含量が高く、整粒であっても軟弱になっているため収穫時に損傷粒の発生が無いように、こき胴の回転数を遅くする。

・刈り取った籾を長時間放置すると変質の原因になるので、刈り取り後は速やかに（４時間以内に）乾燥機に張り込み、できるだけ早く送風を始める。

・乾燥作業は通風乾燥から始め、徐々に加温し殻温が40℃以下で乾燥作業を実施する。特に、急激な乾燥は胴割れの原因となるなど、品質や食味低下の危険性が高まるので行わない。

・収穫時の籾水分は25%以下が望ましいが、これを超えるような高水分籾を収穫した場合、水分のバラツキが大きくなるため、連続した乾燥を行うと胴割れの発生につながる。そのため籾水分が18%程度まで乾燥した時点で、一時中断し半日程度貯留した後に仕上げ乾燥する二段乾燥を行う。

（２）大豆

・病害の発生状況に注意し、雨の合間を縫って確実に防除を行う。

2　野　菜

【影響】

品目や生育ステージにもよるが、①土壌水分過多によって根の機能が低下し、草勢の低下や立枯れを起こす、②日照が不足して光合成が充分行なわれなくなり、草勢の低下、生育の遅延をきたす、③高湿度や草勢の低下により灰色かび病やべと病、疫病、さび病等病害の発生が増える、等の影響が懸念される。

【対策】

（1）野菜全般

・茎葉が軟弱徒長しやすいことから、施肥は控えめとし、潅水も天候を見ながら加減して過湿を避ける。
・果菜類では着果過多を避け、可能な場合は早めに収穫して、株への負担を軽減する。
・苗床では、苗の間隔を充分に取る。
・軟弱な生育をしているときに、急に晴れて高温強日射に曝されると、激しい萎れを起こすことがあるので、すぐに遮光を行なえるよう準備しておく。
・病害虫の発生が多くなるので、適宜下葉かきを励行し、発生初期からの防除を徹底する。
・連続した降雨が予想されている場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。
・薬剤散布を行なう際、軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

（2）施設野菜

・施設内で湿度の高い空気が滞留しないよう、換気に努め、可能な場合は循環扇も利用する。

（3）露地野菜

・地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では高畦とし、可能な場合はマルチ栽培とする。
・肥料の流亡が多い場合は追肥を行うが、過剰になると軟弱な生育となるので、必要最小限とする。また土壌水分が多いうちに作業すると、土壌を固結させたり、茎葉や根を損傷して病害発生を助長するので、水がはけた後に行なう。

3　果　樹

【影響】

病害の感染拡大で早期落葉が助長されると、休眠芽の充実不良や貯蔵養分の蓄積不足が懸念される。

【対策】

・病害の発生に注意を払い、病害虫参考防除例に準じて、雨の合間を縫って確実に防除を行う。また、病害虫発生予察情報を参考に病害虫の発生、被害防止に努める。

4　花　き

【影響】

長雨により、日照時間が不足すると、品目や生育ステージにもよるが、①軟弱徒長による生育不良、品質の低下、②根腐れによる立枯れ症状の発生、③灰色かび病やべと病、さび病等病害の発生、④花芽分化・開花の遅れによる需要期・計画出荷への影響等が懸念される。

【対策】

（１）花き全般

・茎葉が軟弱徒長になりやすいことから、施肥量に留意するとともに（多肥は控える）、灌水も控えめとする。

・日長により花芽分化や開花に影響が大きい品目では、花芽分化の状況を確認するとともに、開花調節（キクの電照等）を行っている場合は、品目・品種に合わせた管理・調整（消灯時期の調整）を徹底する。

・病害の発生が多くなるので、発生状況を観察し、防除を徹底する。連続した降雨が予想されている場合は、雨の合間を縫って防除を実施する。

・薬剤散布を行う際、軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、登録の範囲内で散布濃度を低めにする等の配慮をする。

（２）施設花き

・長雨が続く場合、施設内への雨水流入や地下水位の上昇を防ぐため、周囲に暗渠や明渠を設け、排水対策を行う。

・できる限り被覆資材（天井やカーテン）は新しいものを利用し、日照不足にならないようにする。

・多湿条件になると病害が多発するため、ハウス内が過湿にならないように、換気を十分に行い（可能な場合は循環扇の利用）、防除を徹底する。

（３）露地花き

・排水対策として、ほ場周囲に暗渠、明渠を設置し、ほ場内に雨水が停滞したり、冠水しないように注意する。地下水位が高いほ場や排水性が悪いほ場では、高畦栽培が効果的である。

・湿害により、根の活性が低下すると、生育・品質に影響が出るので、状況に合わせて葉面散布を実施し、生育・樹勢の回復を図るとともに、肥料の流亡が多い場合は、追肥を行うとともに、適宜防除を行う。

・長雨・低日照後の強日射は、株の萎凋や葉焼けの発生が懸念されるので（特にグラジオラス）、寒冷紗等による遮光の準備をしておく。